

校長会広報220号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館
編集・宮崎県校長会
広報委員会



「協働」に必要なもの

五ヶ瀬町教育委員会 教育長 渡木 秀明

大学4年になるとき、卒業論文作成のために「ワープロ」を購入した。プリンター内蔵の持ち運び式で、一気に3行ずつ印刷ができる高速プリントが売りのワープロだった。教員となった後にも、このワープロにはしばらくお世話になったが、あの1995年にパソコンに買い替えることにした。

パソコンに買い替えた私は、「あること」をワープロユーザーの先生方からよく依頼された。それは、A社のワープロで作成した文書データをB社のワープロで使用できるようにして欲しいというものである。ワープロデータは、メーカーによってフォーマットが違い、違うメーカーのユーザー同士でデータの共有はできなかった。「テキストコンバーター」というパソコンソフトは、各個人が持っているワープロデータを相互に変換でき、職員間でのデータ共有は、組織で仕事をする上で大変役立った。

あれから20数年の時が過ぎた。現在、五ヶ瀬町で職務に当たっている。組織内外の様々な方々とお会いし、様々な事柄について話をする日々の連続である。教職員はもちろん、学校教育関係者、社会教育関係者、地域づくり関係者・・・数え出したらきりが無い。教育という行為が、様々な「ひと・もの・こと」が際限なく関わり合いながら営まれていることを改めて感じている。

さて、他と関わりをもつためには、「共通の言葉」が必要である。さらに一歩進んで「協働」しようとするなら、なおさらであろう。

五ヶ瀬町では、令和3年度から学校運営協議会制度、いわゆるコミュニティ・スクールをスタートさせた。会は、地域学校協働活動推進員をはじめ、保護者（PTA）代表、学校評議員等のメンバーで構成され、「地域とともにある学校づくり」の具現化に向けて取り組んでいただいている。また、地域学校協働本部も学校事務職員の参画を得ながら、「学校を核とした地域づくり」について、取り組んでいただいている。先生方、地域の方々には、新しいしくみに積極的にチャレンジいただき大変感謝している。

令和3年4月に行われた第1回の学校運営協議会では、町内全5校が一堂に会し「自分たちの学校では、どんな子どもを育てていくか？」というテーマでそれぞれの立場から意見を出していただいた。私も同席させていただいたが、各学校区の協議会とも、子どもたちのことを思い、活発に議論が進んでいく様子を見て大変心強く感じた。

この場で改めて考えたことがあった。それは、「言葉は、真に共有されているか」ということである。例えば「子ども」という言葉。会で個々が発した「子ども」という言葉は、立場の異なる他のメンバーに正しく認識されているだろうか。

教職員にとって、子どもは、「教育を行う対象であり、学力、生きる力を付けなければならないし、付けてあげたいと思う」存在である。地域学校協働活動推進員の方々にとっては、「地域の未来を拓く人材、自身の後輩であり、毎日笑顔であいさつを交わり、元気を与えてくれる」存在であろう。また、保護者にとっては、「我が身以上に大切な宝物、何があっても守らなくてはならないかけがえのない存在。喜びを与えてくれる存在であるし、時に悩みの種にもなる存在」であろう。これらはあくまで例であるが「子ども」という言葉一つとっても、立場や個々の考え方によって、意味や価値はさまざまである。

こう考えると「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を共に活性化させ、かつ、一体的に推進していこうとしている私が持ち合わせるべきは、独りよがりの信念ではなく、様々なステークホルダーの思いが深層までつながることのできる言葉の変換能力に思えてくる。

五ヶ瀬の子どもたちの幸せな未来に向け、一人でも多くの方が教育に対し主体的に深くつながり、笑顔で協働していくために、教育委員会は、変換能力に優れた温もりある「テキストコンバーター」として、機能していかなければと感じている。

GOKASE Educational Grand Vision

「力不足の自分にできること」

えびの市立加久藤中学校 日高康州

校長となり1年半が経過したが、校長として理想の学校に近づくためには、どんなことをしていけばいいのか、手探りの毎日が続いている。子どもたちには、将来自立した大人になってほしいと思っているので、そのためにどのような学校経営をしていけばよいかを常に考えている。校長になる以前は、「生徒が生き生きとしている学校」「生徒が明日もまた来たいと思える学校」をつくりたいと思っていた。しかし、現状はそう簡単ではなく、不登校や不登校気味の生徒が減らず、どうしたらよいか手探りの状況だ。そのような状況の中、まずは、自分自身の人間力を上げていくこと、そして、先生方の人間力を上げることが大切だと考えるようになった。そのためには、いろいろな考え方に接し、それを一旦受け入れ、自分なりに解釈することが必要だと考える。いろいろな本を読み、さまざまな考えに触れる機会を意識して増やすことが必要だと思う。今、

一番ためになっていると感じるのは「日本講演新聞」だ。さまざまな経歴をもった方々の講演の内容をまとめて記事にしてある。ものの見方や考え方で、自分自身の思いもよらなかったことを知るよい機会を得ることができている。自分で読んで、教育に活かせると共感できるものは、本校の先生方にも紹介している。今は、紹介するだけにとどまっているが、今後は、記事を話題として先生方と教育問題について話を深めるきっかけにできたらと考えている。

学校経営について、深く考える機会をもてなかった自分が、校長の重責を全うするためにはこれからもいろいろな情報を吸収し、消化することが必要だと感じている。

今後も、さまざまな情報を収集していきたいと思う。



恩師の言葉が心に響く

延岡市立東海中学校 井上讓司

将来の自分の姿を調理師と教師とで迷い始めたのが中学2年。その頃、勉強は二の次、部活のことが頭になかった。3年になり高校入試直前の成績はどん底。何とか入試を乗り越え、高校でも思い切り部活に打ち込むことができた。その中で、将来の職業を教師と定めて大学に進学した。そのとき教育実習の期間の私は笑顔が少なかったのか、実習最後の日に「苦しいときこそ笑顔」という言葉を恩師からいただいた。

初任3年目、学級に向かう足どりは重たかった。きっと、笑顔ではなかった。その思いは誰にも話さず、「苦しいときこそ笑顔」と唱えていた。今思うとその後、幾度となくこの言葉に支えられ、これまで頑張ることができた。そして今がある。

私にとってこの言葉は、気持ちを少しだけポジティブに変えてくれる「まじない」のようなもの。笑顔でいることで苦しさを解決できないとしても、私の周りには子どもがおり、笑顔でいることは子ど

もへの思いやり、気配りであることを恩師は教えてくれたのかもしれない。

そして、ときにこの言葉を思いだし、苦しさを受け止め乗り越えようとするとき、多くの支えが得られて乗り越えられたのだと思う。そんな思いから、卒業生のアルバムにはこの言葉を書き続けてきたし、これからも書き続けるだろう。

私が接する人の中には、苦しい思い、辛い思いをしている人がきつといる。その心に気付き寄り添い、私自身が笑顔でいるとき、その人の心も少し前向きになることができるのではないだろうか。そして、ともに頑張ることができるのではないかと。

「苦しいときこそ笑顔」という言葉は、私の心の支えであり、これからも大切にしたい恩師の言葉、いつまでも私の心に響きつづける言葉。



その一言で

日向市立塩見小学校 戸高哲朗

30年程前のことである。当時、私はへき地の小学校に勤務していたが、中学校と隣接していたため運動会は毎年合同で開催されており、地域住民も参加して地域の一大行事といった位置付けであった。そのため、参加者も観覧者もかなり多かったことを覚えている。

その年、私が担当したのは放送であった。アナウンスは係の児童生徒が行うため、私の仕事は専ら音楽をかけたり音量を調節したりといった内容である。開閉会式ではマイクのスイッチを入れたままにし、式台への上り下りの音や振動が入らないよう、アンプで音量を上げたり絞ったりして調節していた。係の児童生徒もよく頑張ってくれてプログラムは予定どおり進んでいった。

ほとんどミスらしいミスもなく、順調に閉会式に入ったところでそれは起きた。万歳三唱をお願いしていたPTA会長さんが式台に上がられて話し始めたが、声が聞こえない。私がマイクの音量を上げ忘

れていたのである。終わってから平謝りであった。

その夜、PTAと合同で打ち上げが行われ、場は多に盛り上がっていた。私も同じように笑顔で参加しながらも、心の中には何かもやもやした感じが残っていた。

その時、中学校のA教頭先生が回ってこられた。そして思いがけない言葉を掛けてくださった。

「今日の運動会が成功したのは、放送が上手くいったからだよ。」

自分の油断から最後に失敗してしまい、落ち込んでいた私は涙が出るほどうれしく、その一言で救われた思いがした。

自分が管理職となった今、それぞれの立場で頑張っている職員一人一人にそのような一言を掛けることができているか、もう一度振り返ってみたい。



支会より

<西諸県支会>

高原町立高原中学校 中山新吾

西諸県支会は、小林市（小学校12校、中学校9校）、えびの市（小学校4校、中学校3校、小中一貫校1校）、高原町（小学校4校、中学校2校）の3市町、計35校で構成されている。壮大な霧島連山を仰ぎ見る風光明媚な地で、湧水、温泉、美しい星空等自然環境に恵まれている。一方、霧島山の火山活動に常に備えていなければならない一面もある。

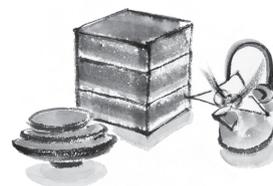
西諸県支会では、2市1町が一体となって、例年、年度当初の総会の他に小中合同での全体研修会を年間2回実施し、校長相互の緊密な連携を図り、校長としての資質向上や学校経営の充実を図っている。西諸県地区の教育振興を図ることを目的に地区研究会を組織し、校長のリーダーシップのもと、各教科等部会の自主的な研修の充実によって、教職員の指導力向上への支援・指導に努めている。

しかしながら、今年度もコロナ禍の影響により、年度当初の総会は中止、第1回研修会は小学校2グ

ループと中学校の3会場に分散開催、各教科研究部会等はそれぞれの状況に応じて中止、または規模縮小やりモート方式での開催となっている。近年、このように参集型の研修が開催し辛くなっているが、西諸支会の先生方には、「西諸は一つ」「西諸の子どもは西諸で育てる」「充実した教育環境をつくる」という熱い思いがある。2市1町のそれぞれ独自の教育施策はあるが、本支会が各教育委員会の支援をいただきながら、各市町の教育ビジョンの具現化を図り、地域と学校の連携・協働により、特色ある地域とともにある学校づくりを推進している。

今後も西諸県支会では、校長相互の絆を深め、地区内の教育力向上、信頼される学校づくり、郷土を愛する児童・生徒の育成を目指していきたい。

「西諸は一つ！」



< 延岡支会 >

延岡市立東海東小学校 山元雅彦

延岡支会は、小学校22校、中学校11校、小中一貫校4校、本年度開校した義務教育学校1校の計38校で構成されている。各学校においては、本市の『わかあゆ教育プラン』において目指す「自他の幸せのために学び行動する子ども～幸動（こうどう）」の具現化に向けて、その地域ならではの教育資源を生かした教育活動をそれぞれに展開している。

本支会においても、この「わかあゆ教育プラン」の基本方針・施策の実現に向けて、小学校校長会、中学校校長会に分かれてそれぞれの研修課題を設定し、研究推進並びに組織運営を行っている。5月には小・中学校校長会合同での研修会を開催し、「保護者対応、その他学校におけるリスク管理」について、その第一人者である2名の大学教授を講師にお招きし、ケーススタディの形で日々の学校運営に直結する事例対応の在り方について学びを深めることができた。

小・中学校別の会の運営については、今回、小学校校長会研修会について述べると、年間を通して、

課題別研修とブロック別特別研修を設定し、協議を深めているところである。課題別研修では各校長のニーズに応えるテーマ設定が行われ、本年度は「働き方改革」「人材育成」を取り上げて研修を行っている。9月には市学校対策支援監に講話をお願いし、8月に行われた『働き方改革フォーラム』を振り返りながら意見交換を行った。10月には経験豊かな校長お二人に「若手教員の人材育成」について実践発表をお願いし、知見を広めることができた。また、コロナ禍でこれまでできなかった各学校を会場とする研修会も再開され、会場校の経営説明や施設見学、授業参観の時間が新たな気付きや学びを与えてくれている。今後も市内の校長同士のつながりを強め、各学校が直面する課題解決に向けての情報共有の場となるよう、研修と組織運営の一層の充実に努めていきたい。



< 日向支会 >

日向市立細島小学校 藤原裕司

日向支会は、小学校10校、中学校4校、そして小中一貫校3校の計17校の校長で構成されている。令和4年度は17校のうち14校の校長が新しい顔ぶれとなった。

本年度も昨年度に引き続き、コロナ禍における学校運営の在り方について、日向市教育委員会指導のもと、17校が情報交換及び共通理解を図りながら取り組んでいる。特に、参観日や文化祭、運動会等のそれぞれの学校行事や「ひまわりフェスティバル」「牧水カルタ大会」「小学校陸上大会」等の日向市の小中学校全体で取り組む行事について、感染状況を見極めながら、実施方法等の協議を行い、実施の可否を決めている。

月1回の定例会を9月までに6回開催した。その中では、今村卓也教育長から、日向市の児童生徒の健やかな成長や日向市が推進する「ひゅうが学びの学校～三位一体の教育『キャリア教育』『小中一貫教育』『コミュニティ・スクール』の充実」について熱い講話があり、17名の校長それぞれが学校経

営に関して使命感を新たにしている。8月には、株式会社MFE HIMUKA代表取締役社長の島原俊英様に「経営者として大事にしてきたこと」と題し、講演をしていただいた。問題意識をもつことや経営理念及び経営指針を明確にすることの大切さ、会社経営を通じた『人づくり』『仕事づくり』『地域づくり』について示唆を与えていただいた。学校経営においても大変参考となる話を聞くことができた。現在、小学校部会では、令和5年度の県校長研究大会及び九州地区小学校長協議会研究大会佐賀大会の研究発表に向けて研修を進め、中学校部会においては、学校運営上の課題やコロナ対策等について協議を深めているところである。

今後も日向支会は、視野を広げる研修の充実に取り組み、会員同士をはじめ市教育委員会との連携を大切にしたい。



編集後記

2022年から2023年へと移り変わる時季となりました。2022年も依然として新型コロナウイルス感染症拡大に悩まされる日々を過ごしてまいりました。しかしながら徐々にwithコロナが浸透し、少しずつではありますが日常の生活が戻る兆しも見られてきました。明日への希望を抱き、笑顔を忘れず、元気に毎日を過ごしていきたいものです。

さて、ここに校長会広報紙220号をお届けします。五ヶ瀬町教育委員会教育長の渡木秀明様には、御多用の中にもかわらぬ、特別に寄稿いただきありがとうございます。また、西諸県・延岡・日向支会の執筆者の皆様、集約・校正にあたってくださった各支会の広報委員の皆様にも感謝申し上げます。

最後に、2023年が、校長先生方にとって充実した飛翔の一年となりますようお祈り申し上げます。